

今回のテーマ

ホームページ用

多様な人々が、共に生きる社会

課題 次の4コマ漫画を読み、Dさんの考えていることを想像してみよう。



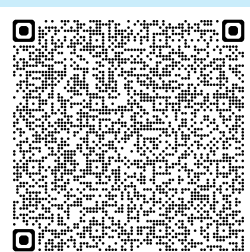
① 5月のいじめゼロ集会

5月8日の「いじめゼロ集会」(生徒会朝会)では、全校生徒で2つの新聞投稿記事を読み、考えました。その際に、生徒たちから出た感想をいくつか紹介します。

記事① 2023年7月25日 朝日新聞朝刊(声)

ネットの向こうに生身の人間

を紹介しました。



私は、対面して悪口を言われるよりも、ネットなどの 文字で悪口を言われる方が何倍も嫌だと思う。

理由は、対面して言われるなら、じゃれ合いのうちか、それとも本気で言っているのかが分かる。どんな人が言ったのかも。それなら対処しようと思えばできるが、文字で言われると、いつでも見られて、忘れることができない上、どんな人が言ったかがわからない。だから、私はネットなどで言われたほうが何倍も辛いと思う。(1年)

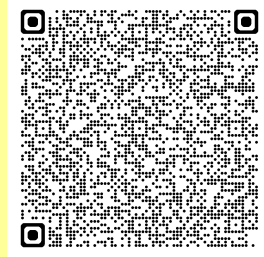
わざわざ手紙を出したり会ったりしなくとも、簡単に遠く離れた人に気持ちを伝えられる世の中になった。そのせいで言葉を受け取るのが自分と同じような人間だということを考えない人が増えているように思った。

でも、なぜ自分や相手にとってなんのプラスにもならないような行為を行う人がいるのか疑問に思う。(3年)

画面の向こうには生身の人間がいることを理解してほしい。自分の好きだった配信者も誹謗中傷により命を絶ってしまった。そして今もネタにされているから、より考えさせられた。受け入れられないのなら距離を取ればいいだけの話。自分がされてどんな気持ちになるかを考えられない人にはネットを利用してほしくない。(2年)

ボーッと生きるなと言われて

を紹介しました。



冗談でも相手が嫌な気持ちになってしまう事がある。どんな事が起こるかわからないから、冗談でも言ってしまういけないなと思いました。言葉を本気に受けとめてしまう人いるから、そういうのを見かけたら、「大丈夫？」などの励ましのコメントを入れたり、そういうのはだめなんじゃないと声をかけたりしたい。傷付く人が一人でも減るようにしていきたい。（1年）

「生きていること自体、ひとりひとりが一生懸命である証明ではないだろうか。」という意見にとっても共感する。でも、あくまで番組は演出やジョークとして扱っているだけで、わざわざその言葉を言い換える必要はないと思う。番組は視聴者を選ぶことはできないが、視聴者は見たい番組を自分で選べる。だから自分で選べばいい。（2年）

番組を見て、「なぜ知らないことで怒られなくてはならないんだ」と思ったことはある。テレビを楽しみたいのに、怒られるのを見るのは楽しくない。怒られている様を楽しんでいる視聴者がいるのもわかっているけど、少し苦手なのは共感できる。（3年）

「この2つの意見には共通点がある。それは、やっている人が見えていないということ。そして、やられている人は嫌な思い抱きながら我慢しているということ。どんなときも、相手のことを考えるべきだと思う。」（2年）

記事②のNHK番組「チコちゃんに叱られる！」で、次の問いが出題されました。みなさんはどのように答えますか？

「人が噂話が好きなのはなぜ？」（2024年1月26日放送）

GOSSIP



記事①に対する3年生の感想に、

なぜ自分にも相手にもプラスにならない行為を行う人があるのか疑問

というものがありません。この疑問について深く考えるためにも、番組の「噂話」に関する問いは重要だと思います。

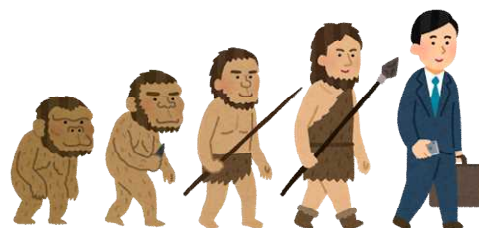
番組で紹介された問いの答えは「生き残るため」でした。一体なぜでしょう？

石器時代の死因は人間同士の争いが約2割であり、集団から排除されたら生死にかかわる問題だったようです。やがて言葉を使い始めた人間は、生き残るために自分をアピールしようと噂話を流すようになりました。さらに、他人の悪い噂を広めることで自分の身を守るようにもなっていたといいます。



そのような当時の経験が脳に刻み込まれ、今も続いているのです。事実、脳は噂話をしているときに活性化するのです。最近の調査で、現代人の会話の6割が噂話だということもわかりました。

もしも本当に、“噂話”の目的が他人を追い込み、自分が生き残るためだとすれば、私たちの会話は無意識に誰かを傷つけるものかもしれないということです。だから、言葉が原因となって命が失われる可能性があるのです。それはまさに“いじめ”です。このことに“無自覚”“無神経”“無関心”であってはなりません。本能に左右されない“判断力”を養うためにも、人間は学び続けていくのだと思います。



②5月の道徳授業

各学年でいじめの問題についてじっくり考えました。授業の内容や、生徒から出た意見の一部を紹介します。



第1学年 教材「魚の涙」

教材のあらすじ	生徒の意見①	生徒の意見②
さかなクンは、中学の吹奏楽部内のいじめを、魚の世界と似ていると言う。海の中で仲良く群れて泳ぐ魚たちを狭い水槽に入れると、1匹を仲間外れにし、攻撃するのだ。さかなクンは、この中学時代のいじめと、魚の世界のいじめの共通点を基に、次のように呼びかけている。「小さな籠の中で誰かをいじめたり、悩んでいたたりしても、楽しい思い出は残りません。」「広い空の下、広い海へ出てみましょう。」	1番大切だと思うことは、物をたくさんの視点で見て、考えることだと思った。自分と考えが異なる人もいるが、それをおかしいと感じてはいけな。視野をクラスから“社会”に広げて見ると見方はかわるのではないだろうか？自分の意識が変われば、いずれ周りの人も変わり、狭い空間の中でも全員が広い視野になれると思う。そのような結果として、社会からいじめがなくなっていくのではないかと考えた。	お互いに相手を理解することが最も大切だと思う。過去の経験では、お互い(または一方)が理解できないことによって怒りや憎しみが生まれていた。そこから、それに共感する人間が集まり、人数の多い方が加害者、少ない方が被害者となっていた。お互いの理解によって負の感情は生まれず、いじめも起きないはずだ。そのため僕は、相手を理解しようとする事、それが大切だと考える。

第2学年 教材「明日、みんなで着よう」

教材のあらすじ	生徒の意見①	生徒の意見②
2007年、カナダの学校で、ピンク色のポロシャツを着て登校した生徒がしつこくからかわれた。いじめられた経験のある上級生のトラヴィスは、友人のデイヴィッドとなんとかしたいと話し合い、翌日ピンク色の物を身に着けて登校しようとインターネット上にある学校の掲示板で呼びかける。翌朝、300人以上もの生徒が、ピンク色の物を身に着けて登校した。その光景を見て、前日にいじめられた生徒は安堵の表情を浮かべたのだった。	「いじめ」と「いじり」の境界線って難しい。相手の気持ちを考えることが大切だと思う。人の悪口を言うよりも、人の良い所を見つけた方が良い。トラヴィスさんの行動は素晴らしい。 	教科書の内容をとおして、ピンク色のシャツを着ただけでからかわれた人がいることを知った。なんでそんなことでからかうのかが、とても不思議でならなかった。 自分は、そんな細かなことで人をからかうようなつまらない人間にならないようにしたいと思った。

第3学年 教材「三年目の『ごめんね』」



教材のあらすじ	生徒の意見①	生徒の意見②
「私」は、小学6年生の修学旅行の班行動で、いつも一人でいる伊藤さんを、「いっしょに行動しない？」と誘う。伊藤さんがだんだんみんなと仲よくなれば良いと思っていた「私」だが、翌日から自分も、班長のみゆきたちに避けられているのを感じる。そして、それが怖くなり、伊藤さんと行動するのをやめてしまう。中学生になり、「私」はみゆきとテニス部に入る。伊藤さんも同じテニス部だったが、みゆきの目を気にして伊藤さんとは話さなかった。3年生最後の試合の前日、「私」は、ラケットのガットが切れ、途方に暮れる。そのとき、伊藤さんが予備のラケットを差し出してくれる。とっさに出た言葉は、「あのときは、ごめんね。」だった。	人間は、時には自己を防御するために嘘をついたり、ごまかしたりすることがある。そんな時には、後ろめたさがともない、自己嫌悪に陥ったり、暗い気分になり沈んでしまったりしてしまう。 不安のなく生活するために、日頃からの自分の行動に注意するとともに、人に対して陰日向なく、誠実に接することが大切である。その結果得られる充実感や満足感によって、はじめて本当に明るい心で生活できる。	自分の今までの経験の中でも、人のことを少しの情報だけで理解した気になり、他の面に向けられることもなく人格を決めつけることがあったと思う。これからはその決めつけをやめたい、減らしたいと強く感じた。 よくある噂話や、相手をよく思わない人からの誇張した表現などを聞き、その認識を鵜呑みにしてしまうことも多くあるが、どれだけ仲が良くても自分で関わり、よく知ることが必要だと思った。 また、伊藤さんのように、嫌なことばかりに目を向けるのではなく、してもらった良いこと、嬉しかったことにも目を向け、ありがとうと言えるような人になりたい。

最初の 課題 の答え

「そういう君が
レッテルを貼ってるよ…」



～本の紹介～

細谷功 著『「具体 ⇄ 抽象」トレーニング 思考力が飛躍的にアップする 29 問』

PHP 研究所、2020 年

※以下は、紹介した本の P 172～P 177 の内容を参考にしています。

Q. 「他人にレッテルを貼る」とは、どういうことか？

人は「自分のこと」を特別に思い、自分の身に起きた物事を具体的に見ながら「そうは言っても……」と言い訳しやすくなります。一方、「他人のこと」は“一般化”し、その人の状況を具体的に見ないまま、「～すべきだ」と正論をぶつけがちです。だから、「他人には簡単にレッテルを貼るくせに、自分がそうされると不満を感じる」ということが起こりやすいのです。

細谷さんは、「他人の具体を見ようとした途端に、他人のことをあだこうだと言うことなど安易にはできないことに気づくでしょう。」と言っています。この見方・考え方は、「いじめ」を生まない人間関係や学級を作るためのヒントになるのではないのでしょうか？

★細谷さんが考える「他人とのコミュニケーション」の秘訣とは！？

「他人のこと」は、なるべく具体的な事情まで知った上で、考えるようにする。

「自分のこと」は、あまり特別視せず、引いた目で見ながら考えるようにする。